

## 論文の内容の要旨

氏名： 青山 美樹

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名： 道徳基盤に関する構成要素と行動の志向性・傾向性の関係性についての検討—日本人を対象とした調査から—

本研究は、道徳基盤理論の考え方にに基づき、提案されている複数の道徳的価値から説明される道徳性の概念構造について、日本人を標本として検証するとともに、その構成要素をより明らかにとらえ、それらを個体の志向性や傾向性との関係性から説明していこうとするものである。そのなかで特に重要なこととして考えるのは、本研究の結果が、単なる先行研究の追試という意味だけでなく、道徳基盤理論が仮定する道徳性の文化的発達という観点からも、特に日本人における道徳性の構成概念（すなわち、ある種の観念形態）としてとらえていくところに重要な意味があると考えられる。本研究の結果は、道徳基盤理論のさまざまな議論に一つの裏付け、あるいは反証を提供することにつながる可能性があるとともに、日本人に特有の志向性・傾向性を示すことにつながる可能性もあると考えられた。本研究では、その構成概念をとらえる新たな調査票を作成し、その妥当性について検証することも試みた。この新たな調査票によって、日本人の道徳性の概念構造をより明らかに、より実体的にとらえることを可能にすると考えられた。

### 道徳基盤理論

道徳基盤理論は、道徳性の概念構造とその機能についての推論である。人間は進化の過程で、さまざまな社会的課題を繰り返し解決するなかで、道徳的な判断に関する複数のモジュールからなる生来的な精神構造を獲得したと考えられている。道徳基盤理論では、それらを道徳基盤と呼び、それぞれの基盤が活動する対象領域を道徳基盤領域と呼んだ。そして、異なる適応的課題から形成された複数の道徳基盤領域が仮定され、道徳性というものが一元的なものではなく、多元的な機能であると考えられている。現在、提案されているのは、「保護 care／危害 harm」（以下、Care という）、「公正さ fairness／欺瞞 cheating」（以下、Fairness という）、「内集団への忠誠 loyalty／裏切り betrayal」（以下、Loyalty という）、「権威への敬意 authority／破壊 subversion」（以下、Authority という）、「神聖さ sanctity／墮落 degradation」（以下、Sanctity という）、「自由 liberty／抑圧からの解放 oppression」（以下、Liberty という）の6つの道徳基盤である。

### モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア（MFQ）

道徳基盤理論の構成概念をとらえる調査票として提案されているのが、モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア（MFQ）である。提案されている6つの道徳基盤のうちの Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity の5つの領域のみで構成されている。5つの道徳基盤にはそれぞれ6つの下位概念が仮定され、合わせて30の下位概念から構成されている。また、5つの道徳基盤のうち、Care と Fairness の2つの基盤を合わせて Individualizing foundations（個人の尊厳）、Loyalty, Authority, Sanctity の3つの基盤を合わせて Binding foundations（義務などへの拘束）、という2つの大きな上位概念にまとめられるとされ、前者には政治的志向としてのリベラル派がより高い価値をおき、後者には保守派がより高い価値をおく傾向があると考えられている。そして、それらは国や文化的背景を超えた安定した傾向として示され、2つの上位概念から政治的志向（イデオロギー）を予測できると主張されている。

### モラル・ファンデーションズ・ビネット（MFVs）

道徳基盤理論の構成概念をとらえるもう一つの調査票として提案されているのが、モラル・ファンデーションズ・ビネット（MFVs）である。MFVs は Care (emotional), Care (physical), Fairness, Liberty, Loyalty, Authority, Sanctity の7つの道徳基盤領域を仮定し、MFQ ではとらえられなかった複数の異なる判断領域を明確に示すことを可能にした。逸脱した第三者の態度をコンパクトにシナリオのなかに描写し、それをいま目撃しているようにイメージさせ、直感的に評価させることで、道徳的判断領域がより直観的

な反応からとらえられるようになり、心理学研究のみならず神経科学研究など幅広い分野で汎用可能になると考えられた。

本研究では、これらの調査票を用いて日本人の道徳性の構成概念をとらえていくことを試みた。

研究1では、道徳基盤理論が仮定している構成概念について検証した。2016年、2018年、2020年の3回にわたり、日本人を対象としたMFQの調査から、道徳基盤理論で想定されている概念構造が、日本人においてもみとめられるかどうかについて考察した。

研究1の結果、MFQの探索的因子分析では、いずれの調査においても道徳基盤理論において想定されている5因子をとらえることはできなかった。2因子を固定して因子分析を行ったところ、第1部のSanctityの項目が予測されていた第2因子ではなく、第1因子に負荷を示していたり、第2部のCareやFairnessの項目のほとんどが、いずれの因子にもはっきりとした負荷を示していないなど、米国で行われた先行研究とは異なる結果が示された。確認的因子分析では、想定した5因子構造の適合度はいずれの調査でもそれほど高くはなかったが、他の構造モデルと比較して相対的にみて適合度は最も高かった。この結果は各国で行われた先行研究の結果とほぼ同様で、日本においても村山・三浦(2019)で同様の結果が示されていた。

研究2では、MFQでは十分にとらえられなかった道徳基盤理論の構成概念を新たな角度からとらえるため、MFVsの日本語版を作成し、その構成概念妥当性の検証を行うとともに、さらに日本人に適した新たなシナリオを加え、それによってとらえられた道徳的判断領域の構造がどのようなものであるかを検討した。

1回の予備調査、および3回の妥当性の検証を経て、最終的に構成概念および外的基準の妥当性を有する調査票として、28の項目からなる日本語版MFVsを提案した。そして、日本人の道徳的判断の基準として、Care (weakの概念を主体とする)、Autonomy (harmとfairnessの概念を含む)、Liberty, Loyalty, Sanctityの5つの因子が示されたと考えられた。

研究3は、2つの上位概念Individualizing foundationsとBinding foundationsから、個人の政治的志向(イデオロギー)が予測できるとする主張が、日本人においても同様にみとめられるかどうかを検証し、合わせて、これらの2つの上位概念と、個人の独立的/協調的、個人主義/集団主義への志向との関係性について検討した。

研究3の結果、日本人においても、2つの上位概念から個人の政治的志向(イデオロギー)をある程度予測することができることが示された。しかし、先行研究の結果と比較して、日本人の個体差は小さく、Sanctityの領域への依拠も、米国人とは異なる傾向を持っている可能性が示唆された。また、2つの上位概念から示された個人の傾向性は、単純な個人/集団への志向から説明できるものではないことが示唆された。

研究4は、道徳基盤領域のそれぞれについて、影響関係にあると考えられる志向性や傾向性との関係性をとらえ、それぞれの道徳基盤の概念が含有するより詳細な意味を説明していくことを目指した。

調査8では、個体の援助規範意識と、道徳的判断の関係性について検討した。弱者救済や返済意識の側面から、Careの概念を部分的には説明していたが、他の領域とも関係性を示し、単独で一つの領域を説明しているとみることはできなかった。しかし、いずれもBinding foundationsよりもIndividualizing foundationsにより高い関係性を示し、内的な動機により強く影響しているのではないかとみることができた。

調査9では、個体の公正感受性や正当世界信念と、道徳的判断の関係性について検討した。公正感受性も、加害者の立場での感受性がCareの領域に影響していると考えられた一方、相関が高いと考えていたFairnessの領域では、いずれの立場の感受性からも予想に反して高い関係性は示されなかった。また、加害者や第三者の立場での感受性は、いずれもBinding foundationsよりもIndividualizing foundationsにより高い関係性を示しており、これらも内的な動機により強く影響しているのではないかとみることができた。正当世界信念では、いずれの道徳基盤領域とも相関は低く、道徳的判断において正当世界信念は関係性の低い因子であることが示された。

調査10では、愛国心/ナショナリズム(国家主義)という個人の国家意識(ナショナル・アイデン

ティティ)と、道徳的判断の関係性について検討した。愛国心/国家主義と特に深く結びついていたのは、Loyalty のなかの歴史 (history) の下位概念であった。先行研究がないため比較はできないが、国家意識という個人のアイデンティティが形成されるうえで、歴史 (history) という道徳的価値がより大きな意義を持っていたことは、長い歴史を持つ日本人に特徴的である可能性もあると考えられた。

調査 11 では、嫌悪の感受性と道徳的判断の関係性について検討した。嫌悪の感受性は、Sanctity の概念を説明する因子として想定していたが、Sanctity よりも、むしろ Loyalty や Authority により強い関係性を示していた。道徳的判断において、汚染を回避することに対する価値よりも、集団を維持することに対する価値により高く依拠しているとみられることは、全体的に集団への志向が高いと考えられている日本人に特徴的である可能性もあると考えられた。

これらの結果から、道徳基盤理論の概念構造として、MFVs から Care, Autonomy, Liberty, Loyalty, Sanctity の 5 領域がとらえられ、これらが日本人に特有の道徳的判断の基準となっている可能性があると考えられた。MFQ からも、道徳基盤と政治的志向 (イデオロギー) との関係性が示され、そのなかでとりわけ Sanctity の領域に対する依拠のパターンが米国人や韓国人とは異なっていることが示されていた。日本人の集団への志向は平均して高く、このことが道徳基盤領域への依拠においても、先行研究とは異なる傾向を示すことにつながっている可能性もうかがえた。また、それぞれの道徳基盤領域は、愛国心や嫌悪感受性といった志向性や傾向性から説明されることが示され、多面的な道徳基盤の下位概念によってより詳細な説明が可能になることが示された。